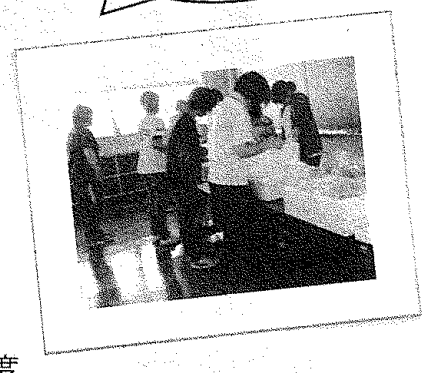
NPO法人　北斗七星　会報　　2019年 秋号（219号）2019.10.23 発行

銀河通信

ＮＰＯ法人　北斗七星
〒376-0006　桐生市新宿 3-3-19
（桐生市総合福祉ｾﾝﾀｰ内）
Tel 0277-43-6151　Fax 0277-46-9504

みんなで 続けて～ 頑張って～ 早や十五年の豆腐作業！

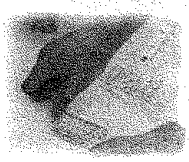
いつもご購入ありがとうございます



作業は、豆腐販売日の前日、午後からスタートです。
社協さんのご協力のもと、当日作業となる近くの部屋へ空の発泡スチロールを運び入れさせていただいております。

そして、当日。定刻に開始できるよう北斗七星の家の指導員が宅配所へ行き、センターに荷物到着。と同時に作業室となる部屋を整え、待機していた指導員と北斗七星の家のみんなが台車をもって出動し、お豆腐が入った発泡箱を積み重ね、3 階まで運んでくれます。センター入口からの台車の操縦は高度な技術が必要です。点字ブロックや床の段差等、巧みな操縦で運び入れ、作業台と化したテーブル上に、重～い発泡の箱を「よいこらしょっ！ と！」の声かけと共に載せ、確認と仕分けをします。冬場の氷詰めの豆腐は、頭がキィ～ンとなる程ヒエッヒエ～㊐ 夏場は気持ちが良いのだけど、素早い作業が要求されます。お魚屋さんではありませんが、鮮度が「命！」ですから～

次はいよいよお届け先ごとの箱＆袋詰めです。みんながわかりやすいよう各豆腐と伝票を表記しています（間違いのないように！ 尚且つ素早く！ ） 最近では適切な大きさのスーパー袋を使用する事をポイントにし、励んでいる仲間もいます。仕分けの後は最終関門（昔風にいったら関所?! ）、事務局長による最終確認。厳しい目を通過後、皆さんのもとへ配達に出かけます。



ある日の配達の様子 ・・・ みんながお世話になった先生方がいらっしゃるお得意様の研究所へお届けに行きました。重たい荷物は力持ちの男子達に任せ、か弱い（??） 女子は空箱を運び…、しっかり役割分担しています。先生方に挨拶したり、handshaking…「手があったかいねぇ～」「冷たいねぇ～」等言われ、お互いの手のぬくもりを感じ、みんな嬉しそうな表情をしています。次の配達先の保育園では、声高な子供達を気にかけながらも、配達は完璧に行っています。

北斗七星の家のみんなが、ここまでの作業や配達が出来るようになるまで、沢山の保護者の皆さんに助けていただき現在に至っています。そして今も伝票の整理から仕分け、配達等々至らぬ部分を大いに follow-up していただいております。

配達を済ませた後はお楽しみの外食です。それぞれ好みの物を注文し、モグモグ食べ満足 ²。そしてホッと出来る第 2 の居場所「北斗七星の家」に戻り、あわただしかった豆腐作業終了。今日も頑張りましたぁ。

月 2 回の木曜日、みんな張り切っています。更なるご注文をお待ちしております。

ご注文いただいた方には、もれなくみんなの変わらぬ笑顔をお届けします。

～これからも“地域”の中で暮らしたい！～

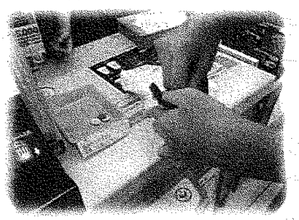
いちばん星

小学生の高学年から中学・高校生までが利用しているいちばん星では、長期休暇中の昼食づくりや毎月の総菜・おやつ作りの材料の買出し、みんな大好き！おやつの買物学習などなど・・近隣のスーパーやコンビニへ買物に出かけています。

近い将来地域で暮らす為に、色々な経験を積んでもらいたい！との思いから、きらきら星同様、開所当初から続けています。夏休みなどは、毎日昼食作りの買物に出かけることから、スーパーの店員さんと顔馴染みになり「今日は何を作るの？」と声をかけて頂いたり、買物学習ではコンビニの店員さんに、支払いの際に優しく対応して頂いたりと、地域の方との触れ合いを通し、気持ちもほっこりできるみんな大好きな活動の一つになっています。

今回掲載されている写真は９月の買物学習“セブンイレブンに出かけよう！”の様子です。車や自転車の往来に気を付けながら、事故のないようにみんなで声を掛け合い歩きます。白線の内側を歩くなど交通ルールを守って歩くことができました☺。

お店に到着してからは、自分の好きなものを選んでもらう為、店内をぐるっと一回り。やっぱり！？大好きなお菓子売りで“何にしようかな～？？”今回の予算は200円。何が買える？何個買える？など指導員と相談しながら決めました。高校生の中には、次の休日に食べるカップラーメンを買ったり、お父さんの為に、晩酌？！のおつまみを購入する優しい人もいました。商品が決まったら、レジに並んで・・・。レジの金額を見ながら、指導員と一緒に“100円いち”“10円、に”など金種を確認しながら、お金を支払い、お釣りとレシートを財布に入れて・・。店員さんのご協力のもと、買物学習させていただきました。



（お店のご厚意で店内撮影させていただきました。いつもありがとうございます。）

きらきら星 in きりゅう

子ども達は日々、地域の中で暮らしています。放課後等デイサービスきらきら星では、地域の中で育まれ成長していける喜びを子ども達と共に感じながら活動しています。活動の一部を紹介します。

☆ 買物学習では、街のコンビニでお弁当やおやつを購入します。1人1人、レジで支払いをさせてもらうので、時間がかかってしまう時もあります（すみません）。店員さんの優しい見守りの中、後ろに並んだ他のお客様にも迷惑がかからないように・・・子ども達も真剣な面持ち（!?）です。
実は店員さんと顔見知りで、「毎日来てくれてるよね。」なんていう事もありました。ベビーカステラのお店の店員さんが、「お店に来るのが大変だったら、こちらから行きますよ！」と移動販売してくれた事もありました。感謝です。

☆ お楽しみの1つに、レストランでの外食やケーキ屋さん・クレープ屋さんでのおやつがあります。団体でお店に入る事も多く、実は指導員もちょっぴり緊張しています。・・・が、公共の場でのマナーを学ぶ良い機会なので、笑顔で頑張っています！
もちろん、子ども達には美味しく食べてもらうのが一番ですが・・・レストランのキッチンからは、シェフが様子を見守ってくれていました。

♪ ケーキ屋さんでティータイム ♪

☆ 自然豊かな桐生の街で大人になっていく子ども達のために、今できる事がどれだけあるか・・・手探りの日々でもありますが、これからも、みんなの笑顔があふれるような活動をこの街で!!

桐生のステキなお店
- レストラン・・フォ○○○工房
- ベビーカステラ・・にゃ○て○
- コンビニ・・セ○○イ○○○
- ケーキ・・モ○シェ○○
- クレープ・・ミ○○○ウィッ○

（ごちゃ・順不同です）

お勧め図書館

「偽善のトリセツ」　～反倫理学口座～
パオロ・マッツァリーノ　著　河出文庫　690円

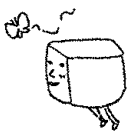
障害児を育てながら福祉と関わっていると、我が子は弱者であり自分達は社会の中で「助けられる」立場なのだと思い知ることがよくあります。テレビのチャリティー番組をちょっと複雑な気持ちで見ながら人の善意について思うこともあるかもしれない。

よく言われる、「やらない善よりやる偽善」。動機はともかく、それで救われる人が確実にいるならそれでいい。そもそも偽善とは何なのか。そんなことを分かり易く、そして楽しく考えさせてくれる本です。

善意のあり方、行き過ぎることなくそれを示すことの大切さ。円滑な人付き合いにも大切なことを教えてもらいました。　（森）

星くずのつぶやき　其の14

おとうふ豆知識

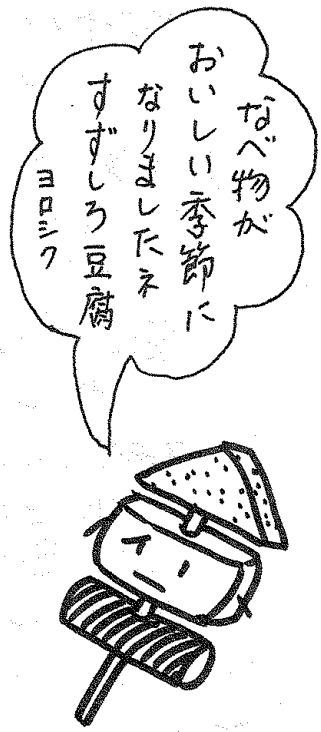


容器にピッタリと入っているものは手作りの証!!
↳ 容器ととうふのすき間がないのがベスト

余ったとうふは水を入れず、ポリ袋等に入れて保存!!
↳ うま味や栄養が流れ出てしまわないように

食べる20分前に冷蔵庫から出しておくと甘味が増す!!
↳ 約17℃で甘さが出てくる

※ テレビ朝日系列の番組
「日本人の3割しか知らないこと」で紹介



編集後記

今度のお出掛けはどこにしようか・・・
買い物学習はどこにしようか・・・と、みんなで相談していると、
おいしいお店があんなところにも、こんなところにも!!
20数年桐生に住んでいますが、まだまだ発見がありそうです。
そして、おいしい情報と体重は比例するんだなぁ・・・

F

フットパス、菜種油、ヒマワリ…

鹿田山3団体が最優秀賞

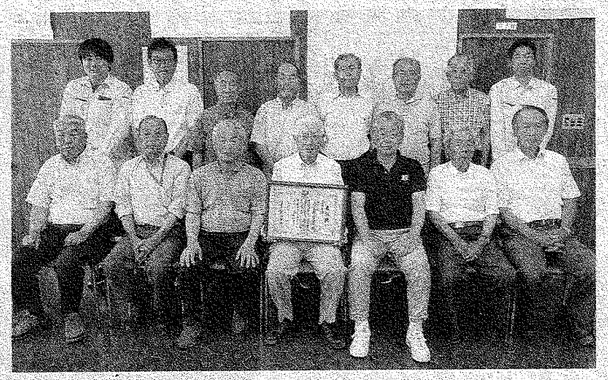
関東農政局長表彰

6/12 朝日

「農福連携のお手本」

渡良瀬特支と住民で里山整備

みどり市笠懸町鹿の鹿田山一帯で里山整備に取り組んでいるNPO法人など3団体の活動が、農水省関東農政局長表彰の最優秀賞に輝いた。同省の交付金を活用し、地元住民や特別支援学校などを巻き込んで、耕作放棄地を散策公園や景観作物の農園によみがえらせた活動が高い評価を受けた。活動の中核を担うNPO鹿田山環境保全ネットワークの新井巌雄理事長は今年度の総会で受賞を報告。「この賞を出発点に、さらに活動を盛り上げたい」と意気込む。



関東農政局長表彰の最優秀賞に輝いた鹿田山環境保全ネットワークの主要団体の代表者ら（大間々用水土地改良区事務所で）

鹿田山フットパスの整備作業。渡良瀬特別支援学校（写真右上）の生徒らを中心に、農家や住民が一体となって里山保全に努めている

受賞したのは同ネットワークと上鹿田むらづくり推進協議会（松原茂雄会長）、大間々用水と地域農業を守る会（田中茂雄会長）の地元3団体でつくる「鹿田山周辺広域協定」（新井巌雄運営委員長）。

関東農政局（さいたま市）が2018年度に創設した表彰で、農業の多面的機能を生かした活動に交付金を支払う「多面的機能発揮促進事業」に取り組んだ団体を表彰するもの。管内10都県の10団体から応募がある中、4団体が最優秀賞に選ばれ、今年2月に表彰式が行われた。

鹿田山では、もともと雑木が生い茂り不法投棄が後を絶たない耕作放棄地だった一帯を、大間々用水土地改良区が04年度に農水省のモデル地区指定を受けて整備に着手。07年度に同ネットワークを設立（17年NPO化）し約3・3㌶を散策公園「鹿田山フットパス」として整備したほか、菜の花を栽培して菜種油を商品化したり、綿花、サツマイモ、ソバ、シャクヤクの栽培などを通じて里山環境の保全に努めている。

同ネットワークは現在、地域の保育園や学校なども含め35団体で構成し、年間で延べ約4500人が活動している。その中心的役割を担っているのが最寄りの県立渡良瀬特別支援学校で、フットパスの補修やトイレ掃除、花壇の手入れなどを年間通じて行っている。

「上鹿田協議会」は、鹿田山東面で毎年10月ごろ満開となるヒマワリ畑を整備し、地域の名所として多くの観光客を呼び寄せている。「守る会」は水路など農業用施設の整備や農地の草刈りなどに取り組んでいる。

こうした活動が、農業を通じた地域住民の一体感づくりや地域活性化、特別支援学校との共同作業による「農福連携」の模範的事例として評価された格好だ。

同ネットワークの総会で受賞を報告した新井理事長は、「3団体それぞれの活動が評価された。この賞を出発点に、さらに活動を盛り上げたい」と意欲を示している。

生徒たちは、担任教諭や弁護士らのアドバイスを受けながら、自分の意見とその根拠を考えた＝岐阜市

「小学部から段階的学習を」

富山大学人間発達科学部の和田充紀（みつのり）講師らが16年秋、全国の特別支援学校約一千校を対象に郵送でアンケートしたところ（回収率約5割）、高等部で主権者教育を行っているとの回答は92.7%に上った。一方、小学部や中学部では広がっておらず、「小学部からの段階的系統的な学習を行うべきだ」との意見が複数寄せられた。

主権者教育の主な内容は、選挙の意味や役割を知ったり、模擬選挙をしたりするもの。ただ、その実践は広く共有されてこなかったという。「知的障害者向けの選挙のテキストがあるとよい」などの要望が強いこともわかった。

和田講師は「選挙での投票の判断は日々の学習の積み重ねの上にある。小中学部の段階から自分で考え、表現する力を身につけさせることが大切だ」と話す。（編集委員・豊秀一）

障害ある子の支援 VRどう使う

東大などプログラム開催

9/23 朝日

病気や障害のある子どもや若者たちの未来に向け、教育や進学を支援するプログラム「DO―IT Japan 2019」の夏季プログラムが、8月4日～8日に東京大学先端科学技術研究センター（東京都）などで開かれた。

東大が中心となり、「学校で自らのニーズに適した方法で学ぶ権利を得ること」などを応援する目的で2007年からスタートした。ソフトバンクや日本マイクロソフトも共催する。

年間を通じて、教育でのテクノロジー活用や、入試・進学での合理的配慮、大学での学び、親元を離れた自立生活の体験、企業や大学へのインターンシップなどの機会を提供している。中高大学生を中心に、この12年間で全国から約150人が選抜されて参加。参加者同士のオンラインの議論なども行っている。

ソフトバンクと東大は今回、障害者と健常者が同じ空間で過ごすインクルーシブな未来に向けて、VR（仮想現実）を生かす方法を模索する活動を、障害のある小中学生とともに行った。参加者らはVRでできる技術について話を聞いた後、VRを体験。自身の学びや生活の中でどう生かせるかを話し合った。

初めてVRを体験したという小学生たちからは「学校に行けない子や入院中の子がVRを使って授業を受けているようにできないか」「体調が悪い日の体育なども自宅で学べるのでは」といった意見が次々と出た。

8日には、中学と高校でのインクルーシブ教育の課題などについて議論するシンポジウムも開かれた。

障害者への支援を義務づける障害者差別解消法の施行以降、小学校などでは障害がある子も通常学級で学びつつ、特別支援教育も受けられる機会が拡大している。大学でも障害のある生徒が入試段階から配慮を受けて、授業でも健常者とともに学ぶことが一般化しつつある。ファシリテーターを務めた東大先端研の近藤武夫准教授は、「中学や高校においては、合理的配慮としてのICT活用など、他の生徒と異なる扱いについて、いまだに不公平と考えられがちだ。大学ではすでに当たり前になりつつある支援も、中高では否定されることがあり、中等教育での障害のある生徒の学ぶ権利の保障は喫緊の課題である」と語った。（宮坂麻子）

VRを体験し、今後の使い方について議論する子どもたち＝東大先端科学技術研究センター

令和元年10月23日発行

NPO法人

「北斗七星」情報箱

にゅうすぼっくす

2019年 秋号

No. 1

にゅうすぼっくす
2019年 秋号
No.1

風が立つ -8-

令和 平成

「どうすればできるか」を探して

プロップス社長 大野裕幸さんの場合

障害者の力を農業に生かす

みどり市笠懸町で青果仲卸業を営む大野裕幸さん(44)＝伊勢崎市在住＝は昨年、障害福祉サービス「PROPS（プロップス）」を立ち上げた。みどり市笠懸町の桐生青果そばに就労継続支援A・B型事業所「大地の子」を開設。野菜の袋詰めなどを通じて障害者の就労支援に乗り出した。「できないと決めつけるのではなく、できるようにするにはどうすればいいのか、しっかり考えたい」。大野さんが考える農福連携の先には、障害者の能力を生かした持続可能な地域の農業の将来像が垣間見える。

大野さんは1974年藪塚本町生まれ。桐生高校から茨城大学工学部に進み、システム工学を学んだ。卒業後、大手量販店のバイヤーなどを経て、青果仲卸会社で働き始めた。

プロップスを立ち上げたのは、それまで障害者の就労支援に取り組んでいた事業所が手を引いたのがきっかけ。野菜の袋詰めを依頼していた大野さんは自ら会社を設立し就労継続支援A・B型事業所の運営を始めた。昨年10月のことだ。

「いまは学校からの実習生を随時受け入れている。来年度以降の利用者増につながれば」と話す。

農福連携には大野さんなりの思惑がある。

今、少子化で人手不足の農家は多く、外国人の技能実習生を頼りにするケースもある。「例えば東南アジアのベトナムからは農業に関心のある実習生が来日しています」

高齢化もまったなしの課題だ。後継者のいない農家で、作り手の高齢化はそのまま農業の終わりを意味することが多い。

土づくり、作付け、除草、収穫、選別、袋詰めと、農業の作業工程は多い。「障害にもさまざまな種類がある。程度の差も人それぞれ。その人に合った作業が見つかれば両者にとってプラスになるのではないか」

農業を取り入れている就労支援事業所はあるがまだ少ない。数多い障害の種類に見合うよう、メニューを増やす可能性が農業にはある。「農福連携の障害者施設どうしが会社の枠を超えて協働できれば効率的でしょう。販路に仲卸や卸、行政がかかわれば、可能性はさらに広がるはずです」

簡単な道ではないが、できないと決めつけることが、障害者就労にとって最大の壁になると、大野さんは考える。

「障害者はここまでしかできない、あるいはこういう失敗をするからだめだと、周囲が決めてしまう場合が多いんです」

野菜の袋詰めにしても、片手が不自由で袋詰めができないのであれば作業工程を分解してみる。「ジャガイモを量る作業ならできる。ゴボウを決まった本数でまとめる作業はできる。できるを探してあげないと、就労支援は進みません」

障害者にできないことはない。「ただし時間はかかる。問題は、支援する側が頭を柔軟にして既成概念を取り払い、どうすればできるのか、考えることだと思うんです」

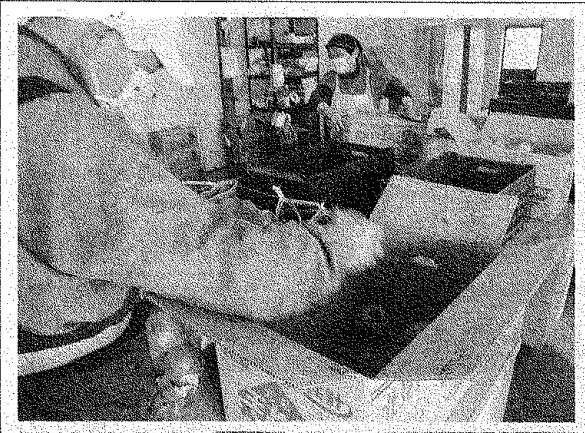
障害者の就労へ、大野さんにはビジョンがある。例えば障害者と支援員が農家から農業のノウハウを学ぶ。支援員がノウハウを学ぶことで指導する立場に回れる。高齢の農家から畑の一部を借り受け、そこで野菜づくりができれば、地域農業の継承にもなる。

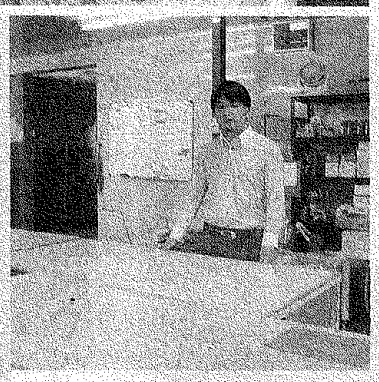
「作ることに専念できる環境があれば、農業に向いているという障害者もいるはずなんです」

扱う作物にも展望がある。「イチゴやトマトの農家では選果の人手が足りないという声を聞く。イチゴの箱詰め作業などは難しいが、向いている障害者もいるんです」。大きなヒントだ。

農業の盛んな地域だけに必要なチャンネルはそろっている。「連携することで可能性は広がるはずです」（毎週金曜掲載）

タイムス 5/21





大地の子で働く利用者とスタッフ㊤大野裕幸さん㊦

【メモ】就労継続支援事業は障害者総合支援法で定められた就労支援事業の一つ。雇用契約を結んで一般就労を目指すA型と、契約はせず工賃をもらいながらA型や一般就労を目指すB型がある

風が立つ -14-

令和 平成

子どもの可能性の芽を探す喜び

重症心身障害児の放課後デイを開設 田島圭さんの場合

回り道してたどり着いた場所

昨年9月、みどり市大間々町の恵愛堂病院そばに、重症心身障害児向けの放課後デイ「Granny（グラニー）大間々」がオープンした。運営する株式会社アソビバの社長・田島圭さん(38)＝同市大間々町在住＝は、美容師の資格を持つものの、福祉の専門家ではない。でも、「だからこそ普通の人の感覚で、現場を眺めることができる」という。子どもたちの可能性の芽を探すためにも、福祉を専門家まかせにはしない。誰もが生き生きと暮らせる社会へ、培った経験を現場に生かすつもりだ。

高校球児だった田島さんは肘を壊し、最後の夏を棒に振った。進路に悩んでいると、先輩から美容の道に来ないかと誘われた。専門学校で美容師の知識と技術を学ぶと、現場で腕を磨いた。美容を通じて他人の人生に少しだけ関わる、そんな楽しさも見つけた。

あるとき若い女性と母親が店を訪れた。母親によると、娘は8歳から10年間引きこもりで、高校を卒業するはずの年齢を迎え、膝まで伸びた髪をばっさり切ってほしいと、そんな要望だった。

田島さんは思い切ってショートボブに仕立てた。後日、母親と出会ったとき、10年分の髪がなくなり気持ちが軽くなったのか、娘は外出できるようになったのだと、感謝の言葉を受け取った。

「あのとき初めて福祉に興味を抱いたんです」

忘れられない思い出はもう一つある。

ウイッグを製造・販売する会社に勤めていたとき、80歳の女性に商品を売ったことがある。厳しい販売ノルマの達成にはどうしても契約を交わしておきたい相手だった。

難色を示す女性を説得し、ついに契約にこぎつけた。でも、契約書へのサインを求めたとき、女性の目から静かに涙がこぼれた。「自分はいったい何をやっているんだろうと、ぼうぜんとしました」

自分にうそはつけないと、その場で契約書を破り捨て、会社を辞めた。

次の勤め先・訪問美容の現場では、福祉の世界で髪を切るという行為の優先順位が低いことに、改めて気づかされた。

健常者は毎月のように美容院に通う人もいるのに、障害者や要介護者の場合だと後回しにされるケースが多い。髪を切りたい、身だしなみを整えたい。でも、自分ではできないし、誰かの手をわずらわせたくもない。

「髪を切ったお年寄りや障害を持つ人たちが、鏡をのぞいたときのうれしそうな顔を見ると、なんともいえない感情が生まれるんです」

プライマリーグループの梅澤伸嘉さんのもとで福祉事業の経営ノウハウなどを学び、昨年5月にアソビバを設立。スタッフを集め、同年9月には重症心身障害児向けの放課後デイGranny大間々を開設した。

路面の施設にしたのは利便性だけでなく、重症心身障害の子どもたちが身近にいるということを、多くの人に認識してほしいからでもある。「学校に通い、終わったら学童に向かう。健常の子どもと変わらない生活リズムがあるんです」

現場では保育士、児童指導員、理学療法士、看護師と、専門のスタッフが随時連携を取りながら、子どもたちの面倒を細やかにみている。

それでも、専門職以外の人がそこに関わることが、子どもたちにとってじつは大切なのではないかと、田島さんは話す。

「福祉の専門ではないからこそ気づくことがある。障害があろうがなかろうが、子どもは可能性のかたまりで、その芽を探すのは大変だけど、本当に楽しいんです」

子どもが自由にふるまえる、遊べる場所を目指す。「人はいずれ何かしら障害を抱える。支え合うことが社会の基本なんです」（毎週金曜掲載）

8/2 タイムス

田島圭さんは桐生市出身。桐生商業高校の野球部コーチを務めた経験もある。問い合わせは放課後デイGranny大間々（電46・9156）まで。

風が立つ -21-

子どもどうしが障害の有無を超える

言語聴覚士 田畑陽平さんの場合

声優の読み聞かせ会に手応え

小和 平成

桐生市出身で言語聴覚士(ST)の田畑陽平さん(30)＝神奈川県川崎市＝は昨年4月、プロの声優6人と協力し、東京都大田区で児童参加型の読み聞かせ会「へいへいと遊ぼう」をスタートさせた。ADHD(注意欠如多動性障害)など、障害ゆえに観劇の機会が少ない親子を支えようと、手探りで始めた取り組みだ。1年半が経過し、子どもの反応は着実に変わりつつあると、確かな手ごたえをつかむ。「障害の有無など飛び越えて、子どもどうしはすぐに相手を受け入れてしまう」。そこに希望があるという。

取り組みのきっかけは訪問看護での経験が大きい。子どもの発達支援を考えたとき、情緒の発達を促すためにプロの読み聞かせや芝居などを取り入れたいのに、多動があると断られてしまう。

「発達障害のある子どもにこそ必要な芸術なのに、見る機会さえ失われている」。これでいいのかと、田畑さんの中に疑問が生まれた。

もう一つ気になったのは、障害を抱える子どもと母親との関係性。訪問支援をする中で、苦しんでいる母親たちの姿を目の当たりにした。「障害を抱える子どもを産んだ自分を責め、周囲の目を気にし、協力的でないパートナーへの不満をのみ込む。そのストレスのはけ口が、つい子どもに向かうケースもある」。母子を支援したいという気持ちが背中を押した。

田畑さんにとって大きかったのは、相談できる声優仲間がいたこと。

一次救急医療機関に勤務したとき、伝え方の技術が足りないと感じ、声優の養成学校で学び直した。卒業後、プロダクションにも所属した。そのとき知り合ったプロの声優たちに、田畑さんは自分の考えを打ち明けた。

言語聴覚士の声優もいれば、弁護士の声優、銀行員の声優と、経歴はさまざまだが、「社会貢献ができるならば手伝うよと言ってくれた。人に助けられました」。

準備を重ね、昨年4月、大田区内の公共施設を会場にレクリエーションを組み合わせた児童参加型の読み聞かせ会「へいへいと遊ぼう」を開始した。

田畑さんが監修役となり、6人の声優が毎月1回〝本気〟の読み聞かせに挑む。静かさを強いられない自由な空間。「発達障害の子どもは忖度(そんたく)なしで、つまらなければ動きだすし、おもしろければ豊かな愛情表現でこたえる。声優たちも鍛えられています」

昨年6月には個人事業所を設立。大田区社会福祉協議会の公認団体として、助成金を活用しながら地道な活動を続ける。

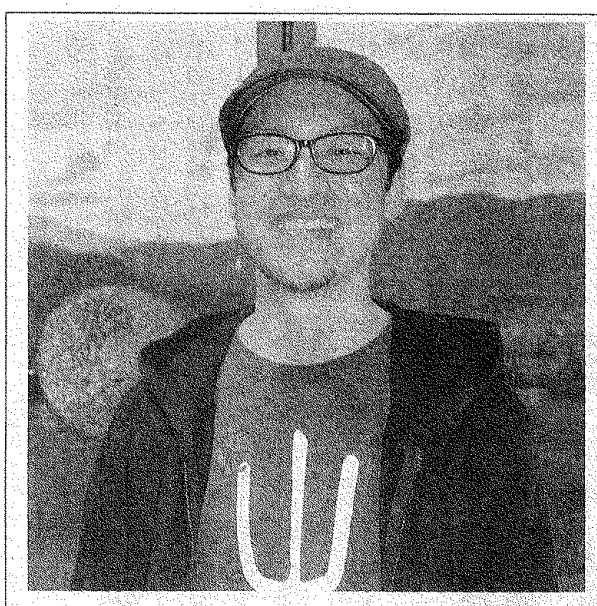
読み聞かせ会には、障害の有無に関係なく15歳以下ならば誰でも参加できる。「子どもどうしは障害を自然に受け入れ、一緒に楽しんでいる。子どもの頃、他者の障害を受け入れる姿勢が身につけば、障害を持つ子どもも、その保護者も、もっと生きやすくなるはずだと思っています」

母親が対話の技術を学び、仲間をつくる場としても機能を始めた。協力してくれる声優の数も徐々に増えている。母校の目白大学とコラボレーションしようという動きも生まれている。

助成金を受けているとはいえ報酬はほぼ無償。それでも「人のために何かすれば何かが返ってくる」という気持ちで活動を展開する。田畑さん自身、小学生のころから発達障害の子どもたちと交わる機会は多かった。「母の影響で、自分もいつか彼らをサポートしたいと思っていたんです」

興味ある人は拒まず。「桐生でも開いてみたいですね」(毎週金曜掲載)

【メモ】言語聴覚士は言語・聴覚・音声・認知・発達・摂食・嚥下などにかかわる障害のメカニズムを明らかにし、検査や評価を行い、訓練や指導、支援などを行う専門職。国家資格。



田畑陽平さんは桐生高校から目白大学に進学。言語聴覚士として一次救急医療機関の勤務を経験。声優養成の専門学校で伝え方を学ぶ傍ら、訪問STとして働いた。昨年6月、office.TBTを設立し代表に。ブログも執筆中で「へいへいと遊ぼう」で検索を。問い合わせはメールでoffice.t.b.t1@gmail.comへ。

桐生タイムス 9/27

障害ある子ない子 一緒に学童

9/14 朝日

母ら立ち上げ 横須賀の施設

生活の場で触れ合い 共に成長

放課後の居場所である学童保育(放課後児童クラブ)。障害のある子もない子も共に生きる「インクルーシブ」を掲げ、受け入れ児童の約半数が障害のある子という学童があります。

鮮魚店や青果店が立ち並ぶ駅前の商店街にある学童に、小学校帰りの子どもたちが続々とやってきた。昨年オープンした神奈川県横須賀市の学童保育「sukasuka-kids」。小学校1年生から6年生まで約30人が通い、常に3、4人の支援員ら職員が見守る。

学童を運営する一般社団法人の代表・五本木愛さん(45)は、娘の麗さん(8)がアンジェルマン症候群という難病。知的障害やてんかんなどがある。

麗さんを育てる中で障害児の子育て情報が少ないと感じ、情報サイト「sukasuka-ippo」を、同じように障害児を育てる母親たちと始めた。名前には「横須賀で一歩一歩進もう」との思いを込める。取材の過程で足りない支援に気づき、市に要望しても制度が変わるには時間がかかると知って、自ら動いて学童を立ち上げた。

麗さんも通う。

「何があったの?」。職員が麗さんの近くにいた子どもに尋ねた。発語が難しい麗さんは、自分の気持ちを伝えられず、他の子どもをたたいてしまうこともある。そんなとき、職員は周りの子どもたちに麗さんがなぜたたいてしまったかを考えるよう促す。子どもは「遊んでいたボールがぶつかってしまった」と言い、「ごめんね」とあやまった。麗さんも「ごめんね」のポーズで応じた。

障害のない子にとっても成長の場だ。藤田玲奈さん(9)は、周囲とうちとけることが苦手で、以前通っていた別の学童ではうまくいかなかった。母の有加さん(29)は「ここに通い始めてから、自分の気持ちを言えるようになって、年下の子の面倒まで見られるようになりました」。

五本木さんは、「障害のある子は『みんなと同じ』経験が成長につながり、障害のない子は他人の思いを想像する経験ができる。双方の育ち合いになる」と話す。「自分と違う人を受け入れることが自然になれば、差別や偏見もなくなっていくのではないでしょうか」

学童には、市などが設置して運営する「公立公営」のほか、sukasuka-kidsのような「民立民営」もある。厚生労働省の調査によると、障害児を受け入れている学童、障害児の人数は年々増加。昨年は、全体の55・9%にあたる1万4149カ所が障害児を受け入れており、調査が始まった2003年の3倍以上になる。しかし、昨年5月時点で児童全体の待機数は1万7279人で、過去最多。五本木さんによると、障害を理由に利用を断られる場合もあるという。

明星大学の西本絹子教授(発達心理学)は、「カリキュラムや成績評価のない生活の場である学童でこそ、支援の必要な子どもたちとの関係づくりを本音の部分で学べる。職員の適切なサポートが必須だが、こうした取り組みが広がれば、共生社会の実現につながっていく」と評価する。

(矢田萌)

学童で友だちと遊ぶ麗さん

入り口には「インクルーシブ学童」と記されている＝いずれも神奈川県横須賀市の「sukasuka-kids」

にゅうすぼっくす
NPO 法人
「北斗七星」情報箱
2019年 秋号
令和元年 10月23日発行
No.2

障害児の笑顔 記念の1枚に

カメラマン・松本さん 高崎にスタジオ

子供と一緒に遊びながら、笑顔を写真に収める松本さん

障害を持つ子供と家族のポートレートなどを撮影する写真スタジオ「スタジオギラバ」が18日、高崎市東貝沢町にオープンする。障害児の豊かな表情に魅了された同市のプロカメラマン松本えり奈さん(38)は、写真撮影に集中できない子供たちや、子供の振る舞いを気にしてスタジオ撮影に二の足を踏む親に、ゆったり過ごせる場所と時間を提供し、心に残る家族の一枚を撮ってあげることを目指している。

(武田佐和子)

松本さんは、企業広告やイベントの撮影を手掛けるカメラマンだ。昨年10月、毎年撮影している前橋市の「前橋まつり」で、ダウン症の女の子が太鼓の演奏に飛び入り参加する場面に遭遇した。周囲を巻き込んで生き生きと演奏を楽しむ表情に、「心の底から祭りが楽しかった。子供たちを撮影したい」と思った。

障害を持つ子供との接し方を学ぼうと今年2月から、障害児の母親を支援する高崎市の団体「iittoko(いいとこ)」が運営する施設で、写真撮影のボランティアを始めた。そこで、七五三や入園、入学、卒業などの記念のポートレートを撮影したいのに、できないでいる母親たちの悩みを知った。

障害の種類や程度によって違いはあるが、子供たちには、じっとすることや集中することが苦手でフラッシュの光を怖がるなど、撮影を難しくする行動や気分の時がある。母親たちは、そんな子供たちの行動が写真館やスタジオに迷惑をかけると思い、出かけるのをためらっていた。普段も子供の世話に追われ、「写真を撮る暇がない。自分ではいい表情が撮れない」という声も聞かれた。

家族の自然な表情をとらえた松本さんの写真

憩いの空間 じっくり撮影

松本さんは、そんな親子たちも来られるスタジオ開設を決意。集合住宅の一室を借り、約45平方㍍の広いスペースにソファを置いて、くつろげる撮影空間をつくった。証明写真や記念日のポートレートだけでなく、子供が自由に遊ぶ姿も撮影する。光を怖がる子供には、フラッシュは使わず、時間をかけてじっくりと向き合うつもりだ。松本さんは、「普段は撮れないような記念の写真を残してあげたい」と話している。

撮影は要予約(050・3738・9335 6 午前10時~午後6時)。一般のポートレート撮影も手がける。

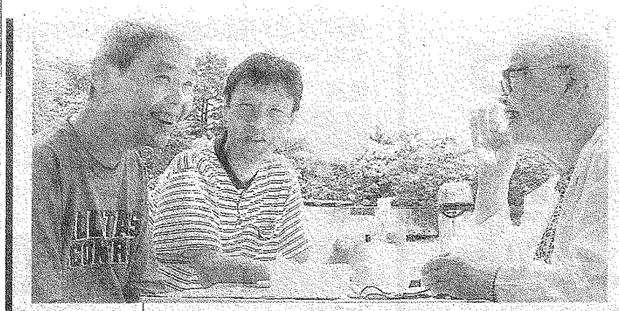
2019年 秋号

No.2

にゅうすぽっくす

やまゆり園か地域か

暮らし 自ら選ぶ



相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者ら46人が殺傷された事件から、26日で3年。事件後、重度障害者が大規模施設に集まって暮らすことが議論を呼んだ。やまゆり園ではいま、施設か地域か、入所者自身に選んでもらう試みが進む。事件を契機に、地域移行を考え始めた親子もいる。

やまゆり園の入所者の多くはいま、横浜市港南区にある仮移転先の「芹が谷園舎」で暮らす。

「きょうは(ファミリーレストランの)ガストに行くよ。なに食べたい?」

尾野一矢さん(46)に、父親の剛志(たかし)さん(75)が語りかけた。神奈川県座間市の自宅から週1回、妻のチキ子さん(77)と面会に通う。「ハンバーグ」と一矢さん。店内で一矢さんがメニューを見て「これにする」と注文を決めた。

「自分の意思を出すことが増えてきたな」。剛志さんは見守りながら言った。

一矢さんは自閉症と重い知的障害があり、10代のころも施設で暮らした。施設からも「自宅で暮らすのは無理でしょう」と言われ、23歳でやまゆり園に入った。管理が行き届いた大規模施設。剛志さんは、ここが一矢さんの「終(つい)のすみか」だと思い定めた。

尾野一矢さん(左端)の家族と介護福祉士の大坪寧樹(やすき)さん(左から2人目)。「また来る?」と一矢さんは笑顔で記者に話した

事件転機 父「一矢は意思を持っている」

一矢さんのためになるならと家族会長を長く務め、月に3回は園を訪れた。それでも、「何かを考えたり、意思があったりするとは思っていなかった」。

事件が転機になった。

神奈川県が園を現地で再建する方針を決めると、障害者団体からは「障害者の生活の場を施設から地域に移す『地域移行』の流れに逆行する」と批判が噴出した。

「園でしか生活できない人がいることを知って欲しい」。剛志さんは当初、強い反発を覚えたという。だが、事件を考える講演会やシンポジウムに参加するうちに、重い障害があっても、介助を受けながらアパートなどで自立して暮らす人がいることを知った。

実際に自立生活をしている人を訪ねた。重い知的障害がある人が介助者とともにアパートで暮らし、外出したり家でご飯を食べたりしていた。

「そういう暮らしもあるのか」

昨夏から、毎週の面会に、介護福祉士の大坪寧樹さん(51)が加わっている。今後は、大坪さんと2人で外出したり、短期間の2人暮らしを経験したりするつもりだ。施設暮らしと、アパートでの生活と、どちらがいいか。両方を経験し、一矢さんが決める。

殺人罪などで起訴された植松聖(さとし)被告(29)は「意思疎通ができない人を刺した」と述べたという。

剛志さんは「彼が『意思がない』と言った一矢は、こうして意思を持っている。そのことを本人に直接伝えたい」と言った。

(神宮司実玲)

入所120人に確認

やまゆり園では、約120人の入所者が将来の生活をどこでどう過ごしたいと考えているか、意思を確認する取り組みが進む。職員や相談支援専門員らが支援する。事件後、厚生労働省が「地域社会における共生」に向けて新たにガイドラインを定めた障害者施策の一環だ。入所者本人の意思をくみ取り、希望している暮らしに近づける狙いで、大規模施設では相談とケアが同時にでき、地域では思い通りの生活ができる。

週1回通う生活介護事業所のメニューの一つ、散歩の途中に子どもとふれ合う奥津ゆかりさん=いずれも横浜市港南区

再建の施設に期待も「まだ迷っている」

芹が谷園舎で暮らす奥津ゆかりさん(50)は神奈川県茅ケ崎市で生まれ、知的障害がある。高校卒業後に就職したが、次第に体調を崩し、2009年にやまゆり園へ入所した。

グループホームでの暮らしを望んでいるが、芹が谷や津久井に再建予定の新施設への期待もある。「気の合う人たちと一緒になれればいいけれど、不安もある。まだ迷っている」

支える側の職員も、試行錯誤を続けている。ある相談支援専門員は「入所者本位で考えるという意味で、『振り回される』ことを前提とした対応が大事だ」と受け止める。

会話ができない重度知的障害者もいて、散歩の際の何げない様子など、細かい記録を積み重ね、本音を見極める作業が続く。成年後見人や行政との調整も必要で、入所者の思い通りになるとも限らない。別の専門員は、「こちら側の『決めつけ』にならないように気を付けている」。

現在、入所者120人のうち110人が、津久井、芹が谷のいずれかへの入居を希望しているという。

(岩堀滋)

教えて!!中島弁護士 暮らしの法律相談 -53-

障害ある子への相続、どうすれば

相談者 相続のことで相談に来ました。私には子供が2人（長男・次男）いるのですが（夫は既に亡くなっています）、長男には知的障害があります。私も70歳を過ぎ、そろそろ自分の相続のことも考えなければと思っているのですが、長男の行く末がとても心配です。遺言をして長男に財産を残すことを考えているのですが、財産があったところで長男は自分でそれを管理できないと思います。何か良い方法はないでしょうか。

弁護士 今はご長男の財産管理はどなたが行っているのですか。

相談者 今は私がやっています。といっても、財産と呼べるほどのものはありませんが。ただ、私が亡くなった場合には私の財産を引き継がせることになるので、遺言をしておけば足りるのか、他に何かしておいた方がよいことがあるのかと心配です。

弁護士 遺言さえ残しておけばよいのかという点ですが、遺言はあくまで亡くなった時点の遺産を誰にどのように引き継がせるのかという話ですから、引き継いだ後の財産管理までは基本的には含まれていません。そのため、遺言だけで十分とまでは言えず、亡くなった後（あるいは亡くなる前であっても）にご長男の財産を管理する方を決めておく必要があるでしょう。

相談者 私としては、次男に長男の財産の管理をしてもらいたいと考えています。ただし、次男に丸投げすることも心配ではあります。そこで、何か良い方法はないかと思ったのです。

弁護士 まず考えられる方法としては、ご長男に成年後見人を選任するという方法が挙げられます。裁判所が成年後見人に次男の方を選任すれば、次男の方がご長男の財産を管理していくことになります。ただし、裁判所の監督の下で行うものであるため、必ずしもご家族のご意思で自由に財産管理を行えるというわけではありませんし、そもそも裁判所が次男の方を成年後見人に選任してくれるかどうかも分かりません。

相談者 私としては、私が亡くなる前に認知症になる可能性もありますので、できるだけ早い段階で次男に長男の財産管理を任せたいと思っています。ただ、今後長男にはお金がかかることが予想されるので、現金だけでは十分ではない場合が生じる可能性もあります。その場合、次男には私の所有する不動産を売却する等してその都度必要なお金を調達してもらいたいのです。

弁護士 そうであれば、信託という方法も考えられます。つまり、あなたの財産を用いてご長男のために財産管理を行うことを次男の方に委ねるという方法です。信託契約設定時点で将来の不動産の売却等の権限も次男の方に与えておけば、比較的柔軟に次男の方が財産管理を行えるかと思います。次男の方に報酬を与えることも可能です。次男の方の財産管理に不安があれば、信託監督人を選任しておくこともできます。

相談者 遺言だけではなく、いろいろな方法があるのですね。

弁護士 これが絶対に正解という方法はないのです。どの制度にも一長一短がありますから、ご事情に即して適した方法を選択していくことが大切です。

中島俊太朗さん

【プロフィル】弁護士（中島総合法律事務所、桐生地場産3階電46・7516）。昭和55（1980）年桐生市生まれ。白鷗大学足利中学・高校をへて早稲田大学法学部卒。

タイムス 2/11

障害者の親の「駆け込み寺」

9/27 毎日

セカンドステージ Second Stage

親が病気になったり、亡くなったりしたら、障害がある子どもは――。そんな悩みに対応するため、行政書士やファイナンシャルプランナーらによるネットワークが全国に広がっている。その名も「親なきあと相談室」。複雑な福祉制度について一元的に相談できるため、親たちの「駆け込み寺」となっている。

●「亡き後」を相談

「今までは何が分からないかも分からない状態だったけど、話を聞いたらちょっと光が見えました」。7月下旬、横浜市にあるマンションのゲストルーム。相談に訪れた小林順子さん(50)は胸をなで下ろした。

長男の将さん(19)は重度の知的障害があり、話すことができない。この日はファイナンシャルプランナーの佐藤加根子さん(57)が、20歳から受け取れる障害年金の仕組みや、貯金のコツについて説明した。

小林さんは約4年前に自身の乳がんが判明。「子どもに何かあったらとは思っていたけど、自分のことは何も。どこかで不死身だと思っていたんですよね」。入院のため、急きょ将さんのヘルパーや学校の送迎を依頼しなければならず、出費が重なった。

退院後も服薬治療が続き、「もし夫まで倒れたら」と危機感は募った。どこに相談すれば良いか分からず迷っていたところ、フェイスブックで佐藤さんの活動を知った。

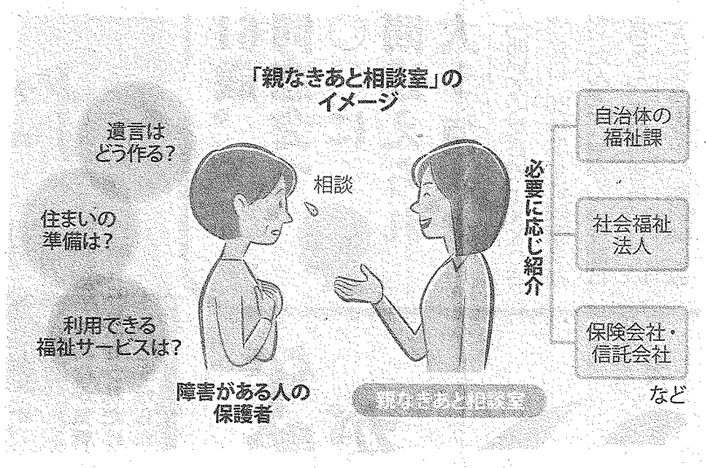
ネットワークの呼び掛け人は、知的障害のある娘がいる行政書士の渡部伸さん(58)＝東京都。お金や住まい、福祉サービスに関する窓口が分かれているのは不便だと感じ、2014年に相談室を始めた。無料または低額で不安を聞き取ったり、他の支援機関につないだりする仕組みで、賛同者が次々に相談室を開設し、全国50カ所以上に広がった。6月には「ネットワーク研修会」を開き、各地の取り組みを共有した。

●国の支援 道半ば

一方、国の取り組みは道半ばだ。国会は12年の障害者総合支援法などの付帯決議で、「親亡き後」を見据えて障害者の地域生活を支援すべきだとの内容を盛り込んだ。国は相談を受け付ける場として、自治体に「地域生活支援拠点」を整備するよう求めてきたが、18年4月時点で整備が済んだのは、全国の約1700市区町村のうち約230にとどまる。

佐藤さんは「一番避けたいのは、誰にも相談できないまま親子が年を取って、共倒れ状態になってしまうこと」と指摘する。高齢の親が、障害がある子どもの面倒を見続ける状態は「老障介護」と呼ばれる。「準備は早ければ早いほうが良い。苦労を抱え込まずに、気軽に相談してほしい」と話した。

「親なきあと相談室」でファイナンシャルプランナーと話す小林順子さん（左）＝横浜市で



NPO 法人
「北斗七星」情報箱
令和元年10月23日
にゅうすぼっくす
2019年 秋号
No. 3

異端アートに光

9/1 読売

生きる語る

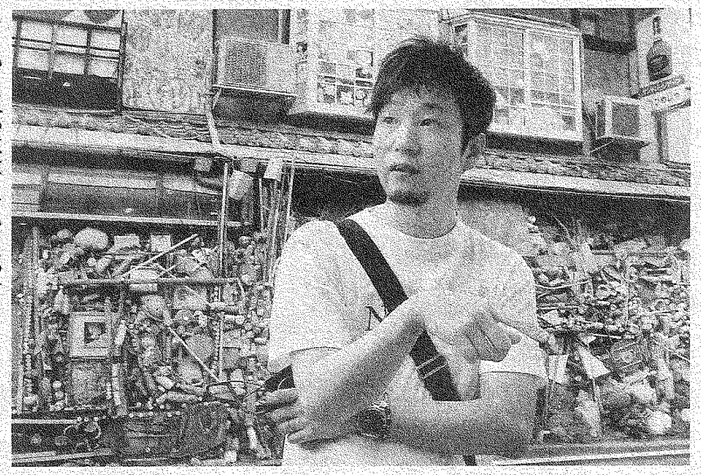
「あるがまま認め 輝く場作る」

広島県尾道市の住宅街を歩いていると、目の前に突然、強烈な存在感を放つ酒店「ひめじや」が現れた。おびただしい量のプラスチックの洗面器や玩具、ペットボトルキャップなどで外壁が埋め尽くされている。

今年6月、櫛野展正（くしのぶのぶまさ）さん(43)が、全国から集まった約20人を連れて行ったツアー。制作者の店主(66)は「好きでやめられないからやってる」と笑った。

これまで全国で18回ツアーを開いてきた櫛野さんの肩書は、「アウトサイダー・キュレーター」。衝動の赴くまま、気の遠くなるような時間と手間を費やして創作に没頭する人々を発掘し、「なぜ人は表現するのか」を問い続けている。

ツアーにゲストとして参加していたタレントの井上咲楽さん(19)は「櫛野さんが紹介する人たちは、面白いことをしてやろうという狙いはなくて、まっすぐな心で表現している。見るのはエネルギーがいるけど、もっと見たくなる」と語る。



「ひめじや」を紹介する櫛野さん。「アウトサイダーのアートは、これから美術史をひっくり返す勢力になるかもしれない」（広島県尾道市で）＝金沢修撮影

＊

同県福山市の教育熱心な家庭で、櫛野さんは育った。地元の有名中高一貫校に入ることが定められたゴールで、幼稚園の頃から塾に通った。合格したものの次第にハイレベルな授業について行けなくなり、自室にこもって漫画を描き続けた。

1年浪人し、「実家から通え、合格できそうな国立大学」という理由で岡山大に進学。自分のセンター試験の成績では選べる専攻が限られており、特に深い考えもなく、特別支援学校の教員養成の専攻に進んだ。

大学1年生の冬、実習で知的障害がある男性と3日間過ごした。最初は話しかけても反応がなかったが、楽器を渡すと鳴らしてくれた。手をつないで歩くと、ぎゅっと握る指先の感覚で気持ちが通い合ったように感じ、「胸がジンと熱くなった」。卒業後、障害者入所施設に就職した。

重度の障害がある人は、食事や入浴など支援の受け手になることが多い。でもよく見ていると、自分にはないユニークな発想を持っている。たとえば、ある男性の入所者。好きな職員が立っていた場所に生えていた草や、その職員が食べ終わった弁当容器など膨大な「痕跡」をひそかに集めていた。

「一見、問題行動や無駄な行為とみられがちな表現も、その人が人生の大半を費やした生きざまそのもの」。入所者のこだわりを生かしたアート活動を支援し、展覧会を開くようになった。

2012年、勤務先の施設が開設する美術館の専属職員を任された。ただ、障害者の作品というだけで、美術館に飾られる風潮には違和感があった。施設を飛び出して街に出ると、障害の有無に関係なく「表現しないと生きられない人」が何人も見つかった。

「占」と書かれた大量の看板やオブジェを創作する占い店の店主、手編みの手工芸品を作り続ける「おかん」――。アウトサイダー・アート（社会の周縁にある芸術）に光を当てた第1回の展覧会は、若者からシルバーカートの高齢者まで多くの人が詰めかけ、話題を呼んだ。

＊

より自由な企画に挑戦するため16年に独立し、福山市内にギャラリー「クシノテラス」を開設。今春には集大成となる展覧会を東京ドームシティで開き、約70人の表現者の作品2000点以上を紹介した。

2万匹の昆虫の死骸で千手観音像を作った稲村米治さんや、素顔や本名を明かさず仮面の創作を続けた「ストレンジナイト」はすでに亡くなった。作品が失われる前に一人でも多く発掘し、その凄みを伝えたい。

自分の信じる表現を生きるエネルギーに変え、居場所を見いだす。その姿に、居場所を探して漫画を描き続けた中高生時代の自分が重なる。「彼らのあるがままを認め、輝く場を作りたい」と、伴走の道を行く。

（田中文香）

国の障害者雇用 訪問調査

水増し問題で法改正へ

読売 10/7

中央省庁による障害者雇用の水増し問題で、厚生労働省は、国の行政機関に対して定期的な訪問調査を実施し、不適切な計上が行われていないか確認する制度を導入する方針を決めた。来年の通常国会で障害者雇用促進法の改正案の提出を目指す。

厚労省が設置した第三者検証委員会が22日に公表した報告書によると、昨年6月時点で、国の28行政機関で計3700人の障害者の不適切計上が行われていた。このうち9割以上が障害者手帳など客観的に障害を確認できる資料がなく、検証委は、障害者雇用制度を所管する厚労省に対し、「雇用実態の把握」の徹底を求めていた。

民間企業では、一定規模の企業に対し、厚労省所管の独立行政法人が約3年ごとに訪問調査を行い、障害者手帳のコピーなどを確認している。法律で義務づけられた障害者の雇用割合（法定雇用率）を達成できなかった場合はペナルティーとして納付金も課される。

導入が検討されている省庁へのチェック体制

	省庁	民間企業
訪問調査	厚生労働省などが実施	独立行政法人が約3年に1回実施※
障害者手帳のコピーなどの保存	義務化。保存期間は要検討	退職から3年間、保存義務あり
ペナルティー	なし	法定雇用率に満たないと納付金が課される※

※は一定規模の企業が対象

一方、省庁など国の機関については、現状では厚労省に雇用実態を調べる権限がなく、訪問調査などは行われてこなかった。厚労省は、障害者雇用促進法を改正して同省が訪問調査の権限を持ち、出先機関も含めた国の行政機関でも障害者手帳のコピーなどの資料保存や障害者名簿の作成などを義務づけたい考えだ。

訪問調査の実施者としては、全国のハローワークで障害者雇用を担当する職員らが想定されている。来月にも障害者代表と労使代表、有識者でつくる労働政策審議会の障害者雇用分科会で議論を始め、来年の早い段階での法改正を目指す。

同分科会長の阿部正浩・中央大教授は「少なくとも各機関がルールを徹底できるまでは、毎年チェックすることが必要だろう。二度と同じ事態が生じないよう、速やかに議論を進めなければならない」と話している。

にゅうすぽっくす
No.3
2019年
秋号

にゅうすぽっくす
NPO法人「北斗七星」情報箱
令和元年10月23日発行
No.4
2019年 秋号

魔法の言葉「無理しなくていい」

5/16 朝日

主婦　平野　千歳（岐阜県　50）

1年ほど前の深夜、おなかが痛いと、当時5歳の娘が暴れだした。血尿もあったので、救急病院へ走った。娘は発達障害の一種、自閉スペクトラム症。感覚過敏でパニックを起こしやすい特性を伝えた。

娘は歯を食いしばって頑張ったが、おしっこが出ない。私は焦りからせかしてしまい、娘は大粒の涙で泣きじゃくった。すると若い看護師さんが近づいてきた。娘が顔をあげると「もう無理しなくていいから」とゆっくり、優しく言った。その瞬間、娘はピタリと泣きやんだ。

その一言に娘も私も救われた。小康状態の間に大病院をあとにし、朝一番にかかりつけ医で膀胱炎の抗生剤を出してもらって、事なきを得た。

「無理しなくていいから」という魔法の言葉は、育児で役に立っている。看護師さんには感謝の気持ちでいっぱいである。

ひととき

「チャリン」の音色

6/7 朝日

帰宅した娘を玄関で迎えたとき、送ってくださった職員さんから「4月分です」と封筒を手渡された。それは彼女の初めてのお給料だった。

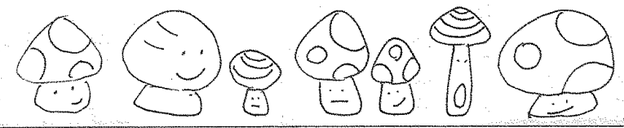
娘は4月から生活介護の事業所に利用者として通い始めた。レクリエーションや運動などのほかに軽作業もあり、作業に対しては工賃が支払われると説明は受けていた。しかし、とにかく楽しんで通ってほしいという思いが強くて、すっかり忘れていた。

封筒には明細書と300円。頑張った証しがここにあった。職員さんの「今日も頑張りました」との報告を喜びつつ、本当にちゃんとできたのかなとも思ってしまい、申し訳なかった。

お給料は娘が自ら貯金箱に入れた。1枚1枚ゆっくりと入れるたびに響く「チャリーン」という音は、娘を笑顔にし、私を泣き顔にした。これから毎月、入れるたびに音が変わり、少しずつ重くなっていくのだろう。でもこの軽やかで誇らしい「チャリン」の音色は忘れずにいたい。

その日以来、娘は帰宅すると必ず貯金箱を振って音を聞いている。これは自分のものという自覚からだと思うが、大丈夫、お母さんは使っていないよ。

（松江市　宍道　京子　主婦　54歳）



ひととき

次男には歌がある

5/7 朝日

「山手のドルフィンはしずかなレストラン、海の見えるまちのぶたいしりたいところです」というメモが食卓の上にありました。

ダウン症を持つ35歳の次男は今、ユーミンにはまっているようです。『海を見ていた午後』の舞台となった街、横浜に行きたいとのメッセージでした。

振り返れば、彼の人生には常に歌が寄り添っていました。童謡に始まり、トトロの『さんぽ』で元気に行進したのは幼稚園の頃。小学5年生で登校しないことを選んだ時、深夜に号泣しながら聴いていたのは『ごめんね』（高橋真梨子）。背中を丸めていた息子が数年後、胸を張って『未来へ』（Kiroro）を歌う姿は、私の目にしっかり焼き付いています。

私が大病を患った時、「がんばれー」と『関白失脚』（さだまさし）を歌う声にどんなに勇気をもらったことか。長男の結婚式での『乾杯』（長渕剛）独唱には皆が感動しました。

心情を言葉で伝えることは得意ではありませんが、歌からは伝わってきます。これからもたくさんの歌が彼の人生を豊かにしてくれるでしょう。「横浜に行ってランチしよう！」と夫と話したのはもちろんです。

（仙台市　佐々木　博美　主婦　66歳）

ひととき

元夫がつないだバトン

7/9 朝日

異国で暮らすダウン症の息子が、二十歳になった。国際結婚の末、10年ほど前に円満離婚。息子へのサポートの必要性などから、親権は現地生まれの元夫に渡った。「仕事もお金もない外国人」となった私は一人日本に戻った。泣き暮らす日々だったが、「大切に育てる」「いつでも会いに来て」という元夫の言葉が救いだった。

彼は約束通り、愛情たっぷりに育ててくれた。どこに行くにも息子と一緒。大道芸人で様々な国を旅して回り、息子に芸も教えていた。いまも息子は芸を披露するのが大好きだ。

しばらくして元夫が病に倒れた。「死」を突きつけられた告知の日、元夫と2人、電話で声を上げて泣いた。だが、精神的に不安定になるような闘病の中、息子に素晴らしい里親を見つけてくれた。そして2年前に亡くなった。

今年、息子が里親やその子どもと来日した。10日間を一緒に過ごし、息子がいかに愛されているか実感した。私たちは、国境を越えた大きな家族になれたような気がする。私はこれからも、毎年会いに行く。元夫がつないでくれた愛情のバトンが、この先も途切れないように。

（横浜市　岩城　千珠　会社経営　52歳）

32歳の長男の自立

7/8 朝日

ひととき

自閉症の長男が家を出た。32歳の自立である。自分のことは自分でやらせ、施設での宿泊訓練も重ねてきた。機は熟して、格好のグループホームが見つかったのだった。

引っ越した翌日のこと、もう長男はいないし、次男もバイトで留守だからと、のんびり遊んで帰宅したのがうかつだった。家の中は真っ暗だ。こんな時、以前は長男がクリーナーをかける音がドアの外まで聞こえてきたのに……。そう思った途端、涙がこみ上げた。30年間もの障害児の子育ての日々を、あっけなく手放してしまったのだ。大きな喪失感に襲われた。

長男はルーティンを守ると安心できたため、掃除を担当してくれていた。これからは、また私の役目となる。同じく彼の担当だった食器洗いは、食器洗浄機にお任せする。ところが、スイッチを押し忘れて、扉を開けると汚れたままだったりする。彼が毎朝5時に新聞受けから取り出していた朝刊はお昼過ぎまでそのままだし、暗くなっても洗濯物は干したままだし……。

長男がたくさんの家事に貢献してくれていたことに、今更ながらに気づいた。2カ月が過ぎても、我が家では不慣れな新生活が続いている。

（川崎市　石渡　ひとみ　主婦　64歳）

息子と私　それぞれ人生がある

2/8 朝日

主婦　石渡　ひとみ（神奈川県　64）

長男が自閉症専門の療育施設に通園し始めた3歳の頃、園長先生からこう言われた。「子どもの犠牲にならないように。お母さん自身の人生も大切にしてください」。意外な言葉に戸惑ったが、頑張りすぎなくていいと言われた気がしてほっとした。

息子は、普通の小学校から中高一貫の養護学校に進み、能力に応じた仕事をして自立できるように、様々な支援を受けてきた。私は息子の気持ちを理解し代弁者としてやってきた。また、社会に自閉症への理解を深めてもらえるよう、私なりに努めてきた。大変だったが犠牲になったとは思わない。一方、園長先生の言葉が頭の隅にあり、ささやかな趣味を持ち経験を生かした仕事を続けた。

32歳になった息子はグループホームで生活を始め「順調ですよ」と胸を張っている。いずれ親亡き後も、社会でプライドを持って生きていくだろう。彼には彼の人格があり、人生がある。園長先生はそれを教えてくれたのだと今ようやく理解できたように思う。

障害者も「シニアジム」使えたら

5/22 朝日

主婦　田中　由佳（東京都　49）

私には重度知的障害のある20歳の息子がいます。小さい時はまったく気にしなかったことを、最近、考えるようになりました。

こうした子どもたちは、学校を卒業して就労すると、一気に生活が単調になり、運動の機会が減ります。個人差はありますが、健常者よりも老化が早いと専門家の方から聞きました。

そこで思ったのは、介護予防的な運動に若い時から取り組めないかということでした。余暇的に取り組み、習慣化できれば、老化を遅らせられると思うのです。「介護サービスに『シニアジム』も」（5日）を読みました。こうしたジムを昼間はシニアの方が使い、夕方は障害のある方が使う。それぞれの施設を造るのに比べコストも減るのではないでしょうか。

言うのは簡単だと承知していますが、昨今、共生サービスという言葉も耳にします。うちのような重度の子どもに限りません。地域のつながりが一つでも多いことは、本人にも家族にも地域にもプラスになると強く感じるのです。

教室に助け合いの循環あったら

4/18 朝日

契約社員　深澤　美保（山梨県　41）

私が通った小学校には特別支援学級がありましたが、インクルーシブ教育も同時に行われていました。勉強についていけない子、発達障害のような子も、通常クラスで一緒に学んでいました。

私は、勉強もできて面倒見のよいタイプでした。だから、誰に言われるでもなく、その子たちのサポートをしていました。それは、私にとっては普通のことで、嫌でもなかったし、負担でもありませんでした。

ただ、私の世話を焼いてくれる人はいませんでした。実際には、私にも発達障害がありました。失敗を繰り返さないようにすごく神経を使って物事をするのですが、まわりには結果しか見えないので「出来る子」と捉えられていました。クラスの中で助け合いが循環していたら良かったのですが……。

インクルーシブ教育、とてもいいことだと思いますが、子どもはみんな援助が必要であることを忘れないで欲しいと思います。繰り返しますが、私は「世話係」をしても負担ではありませんでした。むしろ、役に立つ喜びがありました。でも、私も弱いところがあることに気付いて欲しかったです。

にゅうすぽっくす
2019年 秋号
No.4

障害児の就学を考える

春からの就学や進学に向け、障害のあるお子さんと保護者は今、選択を迫られています。

生活上の困難を克服するための技能などを養う就学先には、特別支援学校や地域の学校にある特別支援学級があります。どちらも通常学級との交流が進められていますが、取り組みには濃淡があります。また通常学級を望む人もいます。教育委員会や学校と相談を重ねて決めますが、地域や学校、教員により対応の違いがあるのが現実のようです。

障害と一口にいってもその種類や障害の重さ、子どもの個性も様々です。どうすればどの子もより良い学校生活を送れるでしょうか。4人の体験から考えます。

幼稚園に加配 優しく支えられ

主婦　米村　希実子（神奈川県　40）

4歳の息子は自閉症スペクトラムです。集団行動が難しいため、幼稚園にお願いし、加配制度で先生を増やしてもらいました。園には息子の特性をかなり理解して頂き、本人のペースで活動に参加し個別に課題を与えてもらうなど、手厚い配慮を受けて楽しく通えているようです。

周りの子どもたちは驚くほど優しく、息子を一人のちょっと変わったお友だちとして接しようとしてくれています。専門的な支援が受けられる療育施設と違い、普通の子が周りにいる環境は、話しかけられる頻度や自分の存在を意識することが圧倒的に多いと感じます。お友だちにとっても、小さな時から色々な人と共に過ごす環境があり、多様性を受け入れる経験を持つことは誰もが生きやすい社会につながるのではないかと思います。

2年前、地域のイベントで「学び合い」というインクルーシブ教育を体験する授業があることを知り、参加しました。お互いの存在を認め合う空気を感じました。そういう教育が広がり、息子もお友だちと一緒に、本人ができる範囲で、できる形で学校という社会に交ざれる経験ができたなら親として嬉しいです。

級友と同じ名簿順にしてほしい

主婦　森田　有希（愛知県　43）

小学校の入学式で掲示されたクラス割り、長女は1年2組45番だった。30人ほどのクラスで45番。自閉症スペクトラムの娘は支援学級に入るが、通常学級にも籍を置く。通常学級の名簿は50音順の一番最後の児童からも離れた45番であった。

教室に入る前、靴箱を探していると職員から「何番？」と聞かれた。通常学級のおまけのように付けられた番号を答えることに抵抗を感じた。

学年が上がっても45番なのは変わらず、娘は5年生になった。たかが番号ではあるが、通常学級と交流するというより、させてもらっているような気持ちが5年間、心の隅にあった。

来年度は次女が、長女と同じ学校の支援学級に入学する。入学に際し、名簿の最後ではなく、みんなと同じ50音順の中に入れてほしいとお願いしたところ、これまで配慮が足りなかったことへの謝罪があり、改善を約束してくれた。

娘は本来、30人の中の1人に過ぎない。障害のある子も当たり前に教室にいて、学校は多様性を認め合える社会への入り口となってほしいと願う。慣例や業務上の都合で最後尾の番号を振っているなら、見直していただきたい。

教師の考え方次第で変わる教室

小学校教員　肥後　紀美子（宮崎県　60）

私は支援学級の担任をしていました。支援学級の子どもであっても、交流学級（通常学級）にも自分の席と役割があり、可能な限り同じ教室で過ごすことはとても大切なことで当然のことです。しかし、教師の考え方で、実行できたりできなかったりします。

例えば、交流学級の教室で、朝の会や帰りの会、給食の時間を一緒に過ごしたり、昼休みの遊びやレクリエーションに参加したりする、交流学級に行くとクラスメートから「お帰り」と迎えられる……。このような経験を通して「自分はこのクラスの一員だ」と感じるようになります。自尊感情も高まります。

こういう取り組みは、教師の努力と共通理解で前進していくと思います。学校内のシステムを変えることについては、はじめは教師の間に戸惑いや不安があると思います。それでも「支援学級の児童は、支援学級で」という考え方から、「支援学級の児童は支援学級担任と交流学級担任が、複数の目で見守り育てる（最終責任は支援学級）」という考え方に変えていくことが大事だと思います。

「健常者が我慢」違うのでは

主婦　杉本　友紀（神奈川県　40）

私は障害児が通常学級にいることには基本的に反対です。以前住んでいた地域の小学校では、娘が1年生の時、同じクラスで障害があると思われる子に暴言を投げかけられたり、教科書などで叩かれたりすることが日常茶飯事でした。娘が怖くて「嫌だ」と言ったことから、私も学校に呼び出され先生から注意されました。数カ月後、突然パニックを起こしたその子に娘は目の下に5センチほどのひっかき傷をつくられて帰ってきました。国語の時間でした。学校からは障害についての説明はなく、「その子の個性」と言われ、謝罪もありませんでした。

健常者は障害者のために我慢するのが当たり前という考え方は間違っていると思います。中学生になった娘は障害者を怖いと言います。理由は「自分が悪者にされる気がするから」。障害児が通常学級で過ごすにはまだ課題があると思うのです。

学校のあり方、教師への教育、障害児の親と健常児の親が理解し合うこと。ただ通常学級に入りたいとか、その方が良いというだけでは不十分だと思います。うちの娘のような思いをする子が出ないことを願います。

障害者の就職

5/1 朝日

障害がある子を育てる親にとって、小学校への就学とともに、卒業後の就労や自立への道筋が気になるところです。

障害者雇用は、法律で法定雇用率の達成が義務づけられる時代になりました。政府や自治体は、就労や定着支援の取り組みを始めています。

一方、昨年は政府や自治体による障害者雇用の水増し問題が発覚しました。また、当事者や親に雇用条件を聞くと、一般的に非正規雇用が目立ち、定着も大きな課題です。東京パラリンピックを来年に控え、障害のあるなしで区別しないインクルーシブな社会を目指す動きがありますが、簡単ではありません。みなさんは、どう考えますか。

その子の将来考えた就学支援に

生活保護高齢者支援員　及川　あやか（東京都　48）

19歳の長女は自閉症と知的障害があります。福祉的な就労をする「就労継続支援B型」の事業所に通っています。特別支援学校の高等部を卒業しましたが、希望の保育園やスーパーで不採用となり、就労移行支援事業所も受け入れられませんでした。

小学校就学時は、養護学校と心身障害学級の両方の教師から「心障には重すぎる、養護には軽すぎる」と言われました。今は「B型事業所には（障害が）軽すぎる、企業（の障害者雇用）には重すぎる」と言われてしまいます。

軽度の子どもは、高等部卒業時に療育手帳が出るか出ないかという状況です。出なかったとしても、一般就労での採用は難しいです。学校では障害者雇用枠での採用を目指して教育されてきたためです。

就学相談では「その子の今」しか見ません。その時点から、その子の将来像も考慮して考えてほしいと思います。

忘れられない実習先での罵声

主婦　本郷　智子（大分県　59）

「こんなやつを働かせるなんて、お前らはバカか！」

息子が特別支援学校高等部1年の時、職場体験で言われた言葉です。図書館の受付で、職員の方と貸し出しカードの入力をしていたところ、常連の高齢者が職員に浴びせた罵声でした。息子は「自分のせいで職員の人が『バカ』と言われた。申し訳ない」と落ち込みました。

脳性マヒで四肢体幹機能障害のある息子は車椅子で生活しています。知的障害はなく保育園、小学校、中学校は地域の学校で健常児の友だちと同じクラスで学びました。高校は特別支援学校を選びましたが、英検2級にも合格しました。

息子は今、大学4年生。成績優秀で大学から表彰されましたが、手足にマヒがあるため就職は絶望的です。たとえ就労したとしても、周りの理解がなければ本人が傷つくだけかもしれません。重度身体障害児の就労はさらに困難なことを知って欲しいです。

障害に合う支援 親が奪わないで

会社員　岩崎　匡洋（静岡県　55）

官庁の障害者雇用の水増し問題が起きたことで、障害者手帳を持っている人の就労環境は改善されつつあります。しかし、手帳を持っていない障害者も相当数いることを知って欲しいのです。

神奈川県内に両親と暮らす、自閉症と思われるいとこも、その一人です。学校時代も通常学級で過ごし、障害に応じた就労支援や教育は受けてきませんでした。親が社会的地位への影響や周囲の目を気にしたということがあるのかもしれません。手帳がないと、就職も一般採用枠になります。しかし、採用されてもすぐクビになってしまいます。

いとこは、もう50歳。80歳を過ぎた両親の年金で生活しています。障害を持った子どもに対し、一人で自立して生きていくのに必要な職業教育を受けさせてあげることを怠り、障害者手帳も持たせずに福祉の支援を受けなかった。こうした子育てのつけは、後々の人生に響きます。

親や教師は成長機会奪わないで

障害者人材育成会社経営　家住　教志（大阪府　36）

私の娘には重度の聴覚障害があります。子どもの将来がとても不安でした。そのため、障害者を雇用する側になってみようと、大手外食チェーンの人事部門に転職し、支援学校や施設を訪問しながら障害児の採用と育成をしてきました。

親と雇用側の両方を経験して分かったのは、社会経験の圧倒的な少なさです。親は長い間、代理行為を行い、成長の機会を奪ってしまっています。特別支援学校は、通う子どもたちのボトムに合わせた教育をしています。重度の障害児にとっては非常に良いですが、知的障害のない、特に軽度の障害児には、成長のための負荷がかかりにくい環境です。それ故、経験値が少なく、能力はあるものの打たれ弱い生徒が多くなりがちです。

経験値が少ない中で進路を決めなければならず、安易な志望理由で決めてしまうこともあるのでしょう。障害者雇用枠で就職しても離職が多いというのは、なるべくして起こっていると思います。